

一人暮らしをしている高橋さんには、介護旅行で叶えたい夢が四つある。

一つ目はおなかいっぱいラーメンを食べること。サラリーマン時代には毎日のように食べていたからという。二つ目は会社の慰安旅行でいった箱根で温泉に入り、湯船につかること。病

に倒れてから三年、

実現に必要な周囲の支え

風呂が怖くなっていた。三つ目はオーケストラの演奏を生で聞くこと。ベッドの上で過ごすことが多くなつてから、ずっと心を癒してくれたのはクラシック音楽だったから。最後は、潮風に吹かれながら海岸を自分の足で散歩すること。自然を肌で感じたいと思っていた。

両親が亡くなつて、ときどき見舞いにやってくる妹さんに、「トラベルヘルパーなら願いを叶えてくれるはず」と話したという。妹さんは兄の思いを携えて相談



▶「もう一度歩いていこう」と訪ねた想い出の海、江ノ島海岸

に来了。

しばらくして、すべての夢を叶えた旅は無事に終わった。高橋さんはいつもの暮らしに戻っている。「顔色も姿勢もよくなつて、もうひとつ生きがいを見つけて帰ってきた」と、リハビリを行う理学療法士は話した。外へ出れば、不自由な身体には不便な環境が待っている。しかしそれを覚悟で旅へ出るから、新しい出会いがあり、懐かしい再会もある。そういう話を聞けば「自分もやってみよう」と思う人、家族もいる。

この四月から障害者差別解消法が施行された。身体の不自由な人が旅に出るには、本人の勇氣はもちろん、周囲の支えが必要になる。気持ちよく旅へ送り出してくれる施設のスタッフがいて、受け入れてくれる交通機関や観光業者など他の理解と協力は欠かせない。この法が価値を持つかどうかは、身体に不自由な人たちが旅を終えたあとに出す答えにかかっている。

高齢になっても笑っていたい。旅への憧れは誰でも同じだと思ふ。



介護旅行

SPIあ・える倶楽部社長
篠塚 恭一



1961年千葉市生まれ。大手旅行会社の添乗員を経て91年(株)SPI設立。ホスピタリティ人材の育成派遣に携わる。95年よりトラベルヘルパーの育成をはじめ、旅のユニバーサルデザイン、介護旅行「あ・える倶楽部」の普及に取り組み。06年NPO法人日本トラベルヘルパー(外出支援専門員)協会設立。著書「介護旅行に出かけませんか」(講談社)他。(株)SPI あ・える倶楽部代表取締役社長。NPO日本トラベルヘルパー(外出支援専門員)協会理事長